

和泉式部

馬場あき子



和泉式部

馬場あき子



美術公論社

著者紹介 馬場あき子(ばば あきこ)
1928年東京に生まれる。昭和女子大学卒業。
歌集に『桜花伝承』『雪鬼華麗』『ふぶき浜』他。
著書に『式子内親王』(講談社)『鬼の研究』
(角川書店)『修羅と艶一能の深層美』
(講談社)『古典への飛翔』(読売新聞社)
『日本女歌伝』(角川書店)『きもの随想』
(美術公論社)他。

和泉式部

昭和五十七年九月一日 初版発行
昭和五十七年十一月二十五日 第二刷

著者 馬場あき子

発行者 石坂敏夫

発行所 (株)美術公論社

①41 東京都品川区東五反田二丁目一六
番三(四九)二八四(代) 振替・東京二八三六

製印 本刷
凸版印刷株式会社

定価 一五〇〇円

©Akiko Baba, 1982 Printed in Japan
ISBN4-89330-010-5

乱丁・落丁はお取り替えます。

目 次

一、和泉式部の恋の原点に

——冥きより冥き道にぞ——

.....9

二、橘道貞との結婚と破綻

.....23

1 この世にはいかがさだめむ

2 憂きもあはれと

3 もろともに立たましものを

4 昔みし人にとひてや

三、為尊・敦道両親王との恋

.....53

1 夢よりもはかなき世の中を

2 きかばや同じこゑやしたると

3 眺むれど心もゆかず

4 いまひとたびの

5 手枕の袖

6 ことばふかくも

7 今宵のことを夢になさばや

8 いと興ありきやな

四、帥宮敦道親王への挽歌

1 なき人の来る夜ときけど

2 なほあまにやなりなまし

3 わがもろ声に呼子鳥

4 おぼつかなしや明けぐれの空

五、上東門院の和泉式部……………

145

1 うかれ女の扇

2 藤原保昌との結婚

3 女友達との交流

4 小式部の死

5 花にのみ心をかけて

6 かかれば鴛鴦もなくにぞありける

六、和泉式部の恋の歌と場……………

207

1 はかもなき世を頼むかな

2 うき名をすすぐ水

3 いかなる花かふたたびは咲く

4 頼めて来ぬ男たちへ

5 沢の螢

七、和泉式部の恋の歌……………253

——思ふ人天降り来む——

あとがき……………274

和
泉
式
部

一 和泉式部の恋の原点に

——冥きより冥き道にぞ——

冥きより冥き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ
山の端の月

どのような悟りに遠い蒙昧な日常に身をまかせ、自分自身を見失ったまま惰性に流されて生きている、そうしたやる方ない不安にかられている女人の思いが、「入りぬべき（……入ってしまうだろう。きつと入ってしまうにちがいない）」という忸怩^{じじ}として屈折した三句に苦しげにみつめられたあと、下句は「はるかに照らせ」とかなりつよい命令形のひびきをもって「山の端の月」の力が求められている。

いったい和泉式部は、こんな歌をどのようなときにうたっているのだろう。歌は『拾遺集』

にはじめて一首だけ収録された式部の初出歌で、名は雅致女式部まさむねのむすめのかきよとされている。『和泉式部

集』にある詞書では、播磨の書写山円教寺を開いた性空上人に仏縁を求めて申し送ったとある。性空上人は仏教説話の中でも、奇特なというよりは、ふしぎな、そして、どこかなつかしい滋味あふれるエピソードにみちた高僧で、なかでも、神崎の遊女の長者こそ普賢菩薩だという夢の告げを信じて遊楼に上った話は有名である。囃しうたう遊女をみつめつつ静かに目を閉じると、それはそのまま普賢となり、うたう声は讃仏の和讃のひびきとなった。結論的にいえば、最も底辺的な世の濁りに沈んでいる遊女の中に、上人は仏の哀しみをみつめる目をもっていたことになる。僧位をもつ都の官僧と違う、こうした上人に結縁を求め、救済を願った一首をもって、歌人和泉式部の作品世界が開幕することも、その後の式部の命運と考え合せる感慨が深い。

ところで「雅致女式部」と呼ばれた頃の和泉式部は、いったい何歳位だったのだろう。それはこの内面的な歌について考える場合にも大いに関係があることだ。ところが和泉式部の生歿年は不明であって、残念ながらこの歌の制作年代にはほぼ十年のひらきをもった諸説がある。

私は単純な読解力をもった日々に出遇ったこの一首を、三十代に入ろうとする自らの内面と重ね合せ、ようやく中年にさしかかる頃のやる方ない不安を内攻しつつ、共感し、愛誦していた。

そういう時期、捨てがたい自愛の情とともに、生きるめやすがふいに当てどなく思われ、中途半端な哀しみに捉えられるような時がある。この歌は、そうした日の内面に切実にひびく力をもって訴えてくるものをもっていた。

性空上人が九十八歳という長寿をまっとうして書写山に逝いたのは寛弘四年（一〇〇七）である。「冥きより」の一首はもちろんこれより以前に作られていなければならないはずだ。和泉式部の年齢は、その娘小式部が関白教通の子を寛仁二年（一〇一八）に生んでいることを目安に逆算推定されて、寛弘四年（一〇〇七）はば二十九歳〜三十三歳位と考えることが通っている。そして、寛弘四年には、式部の一代の恋の対象となった帥宮敦道親王も二十七歳の若きで早世してしまった。

しかし、少し溯って寛弘初年の頃に目を移せば、和泉式部は帥宮敦道親王との恋愛が進行中であり、賀茂祭りの見物には親王と同車し、忌中の赤札を下げて片御簾を下ろすという奇抜な恋の演出が都中の話題をさらった年であり、先夫橘道貞が新妻を伴って陸奥守として任地に下向した年でもあった。こうした条件からは、まさに数奇な運命の予感におののきつつ、三十代に入ろうとする女人の歌としての位置づけもふさわしく思われてくる。

ただ、厄介なのはこの歌にある「雅致女式部」という和泉式部の名称である。和泉式部の父大江雅致は、すでに長保三年（一〇〇一）敦道親王の兄為尊親王との恋愛が進行する過程で、

この受領の妻としての資格に欠けた娘を恥じて勘当し、親子の縁を切っていたし、道貞も式部を離別している。こうしたことから「雅致女式部」という名称が適切である時期は、離婚後の和泉式部よりも、道貞との結婚以前、長徳元年（九九五）かその翌年頃がふさわしいということにもなる。年齢的には十七、八歳である。

長徳元年は疫病流行がしきりの年で、三月に大納言朝光がなくなり、四月には関白道隆と左大将済時、五月には左大臣重信、中納言保光などの高官が相ついで薨じ、さらには道隆のあとを継いだ弟の関白道兼も就任後、半月もたたぬうちに薨じて、残された定子皇后・伊周・隆家等、いわゆる中関白なかのかんぱく一族の急速な没落がはじまる年でもある。こうした状況の中に生まれる不安は暗く重く、これもまた「冥きより」の一首と無縁ではない。

しかし、それにしても、十七、八歳ほどの若い女性の、まだ結婚もせず、宮仕えらしい宮仕えの経験もない女性の歌としては、あまりに深い暗さを抱いたひびきではないか、という疑問も残るだろう。「哀傷」の部類に収められたこの一首は、じつは『法華経』の文をそのままにうたったもので、十七歳の内面ではなく、「冥キヨリ冥キニ入ッテ永ク仏名ヲ聞カズ」という部分に「山の端の月」を配して一首にまとめ上げたものである。『法華経』の有名な一節などは当時の貴族たちの基礎的な教養として暗誦するところであつたから、当時の人々なら、すぐ、出典まで誦そとんずることのできる初歩的発想だという見方でもできるのである。

しかしながら——、そうつぶやきながら、私はなおこの一首に執しつづ足を止める。鴨長明のかいた歌書『無名抄』の中には、この歌に関する興味深い逸話が記されている。四条大納言公任に、その子定頼が、和泉式部と赤染衛門のいずれがすぐれているかをたずねたところ、公任は、式部の「津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ蘆の八重ぶき」という秀歌を賞揚して、同列にいうべき歌人ではないと式部に高い評価を下した。

定頼は世評に高い「冥きより」の一首を想起しながら、式部代表歌はこの一首ではないのかと問いつめたところ、公任の見解は次のようなものであった。「この歌の半分は経文のことばゆえ特に評価するには及ばない。上半句がこのようにできてしまえば下半句はごくしぜんにはるかに照らせ」と出てくるもので、これも特別な工夫がある歌とはいえないだろう。ところが「へこやとも人を」の方は「来や」と「昆陽」の地名が掛けことばにされたあとをうけて、へ隙こそなけれ蘆（足）の八重ぶき」のことばをつづけてみせるなど、凡夫の思い寄るところではない」と。

ところが長明はこの逸話にさらに次のような見解を加えた。歌には巧みな歌と、よい歌とがあるものであって、歌人としての力倆を定めるためには当然「こやとも人を」の一首をえらぶべきだが、式部の代表歌としては「はるかに照らせ」をあげるべきであろう、と。

これはまことにすぐれた結語であるといえよう。もしこの一首が、十七歳という初心に湧い

た詠嘆であつたとしても、「冥きより冥き道にぞ入りぬべき」という、何とも晴れやらぬ内攻的措辞や声調の翳りは、あの経文の一句を直接わが身にかかわる固有の不安として、また予感として受け取ることを読者に要求するだろう。

以上のようなことから、和泉式部の評伝の中では、この一首はいくつかの異なる背景を負つた鑑賞の場を用意するであろうが、そのどの場面を考えてみても、この一首の地位は決して軽くはない。

赤染衛門と和泉式部とは、とかく対比されやすい女流であつた。それは歌人としての優劣よりも、身持ちのよい賢夫人として「匡衡衛門まきひらゑもん」と夫の名を直接かぶせた愛称をもつてよばれるほどの赤染衛門に対して、とかく情に流されやすく、多くの男からつねになにがしかの期待感をもつてみつめられ、紫式部からは「けしからぬ方こそあれ」と批難される不行跡を、よるとさわると噂されてしまふ和泉式部の人間的弱さが、あまりにも対照的であつたからである。

歌人としての作品を検討すれば、誰しも和泉式部が上であることはわかつていた、とはさきの公任大納言のことばである。公任大納言といへば紫式部も遠慮したほどの才学の人で、かつて関白道長が、大井川に催した遊宴に、作文・和歌・管絃の船をもうけたが、そのいずれに乗つても当代一の名を得ることができるといふ、いわゆる三船の才をもつた人物である。その公